

＜書 評＞

著

服部一郎（長尾病院長）

細川忠義（長尾病院理学療法士技師長）

和才嘉昭（九州リハビリテーション大学校理学療法科教授）

リハビリテーション技術全書 改訂第2版

福井園彦（七沢老人リハ病院・鹿教湯病院）

リハビリテーション技術全書の第2版が上梓の運びに至った。初版は昭和49年であるが、“何でも具体的に解りやすく書いてあって直ぐ役に立つ本”として、この領域を志す人達に広く読まれていたものであった。

第2版はさらに新しく、バイオフィードバック療法、振動障害の理学療法、運営管理の章で言語治療士と義肢装具士の項目などが追加され、障害評価の内容が大幅に変更になり、その他全般にわたって細かく手が加えられての大改訂となった。1070頁に及ぶ圧巻である。

具体的に懇切丁寧、初版同様、図表が非常に多く、それだけを見ていても大変得るところが多いのである。それに何より驚くことは具体的な細かい点が懇切丁寧に記載されている点である。すでに熟知している筈の項目について、この書物に目を通した誰もが、自分の知識の浅かったこと、知らなかったこと、誤っていたことなどを発見する、改めてハットさせられる書物なのである。

それは、服部先生はじめ著者の方

方の長年の苦労と経験がにじみ出ているからであり、人柄が溢れ出ているからなのである。

自分で実際に苦労して試行錯誤した経験がなければ決してこのような書物は書けない。

たとえば、肩関節可動域訓練のための滑車一つを取り上げてみてもその様子が解る。今でこそ滑車の構造に苦労する人はいないし、注意を払う人もいない。しかし、今から30年前には、どの方向からロープを引いても、滑車の溝から外れないようにするには滑車の構造をどうしたらよいか、これは1日に何回となくロープが外れてしまうため、はめ直しをしなければならなかったPT訓練室の歴史を知らないとは理解できないかと思われる。いろいろと工夫して町工場で試作品を作らせた時代の苦労の後がうかがえるのである。

服部先生が九大温泉研究所から九州労災病院に移られて、リハビリテーションの（当時、わが国ではリハビリテーションという言葉は用いられていなかったのであえて“的”と

いわせて戴くのであるが）仕事を始められた昭和23年頃は、第2次世界戦争後の混乱が残っていた時代で、海外からの医書はいうに及ばず、国内においても、ザラ紙の医書を手にすることすら困難な荒漠とした国民総空腹時代であったから、リハに関する文献はどこを探しても無駄なことであった。

したがって、滑車一つの例から想像できるように、わが国のリハ医学の開拓は試行錯誤的で、遅々と進まず、効率の悪い、大変苦労の多い仕事であったのである。本著は服部先生方の血と汗の歴史であり、同時にわが国のリハ医学の歴史でもあるといえよう。

また、別の面から見れば、現在は使われていない器具・器械類や治療法も記載されているから、戸迷うこともあるかもしれないが、それらは先人の歩んできた道を知り、将来へ躍進するために重要な役割りを果たすものと考えられる。

この第2版では新しい項目が追加されたり、改められたりして、文字通り温故知新の著となった。

現在、選択に迷うくらいにリハ関係の書籍が出廻っているが、本著はその貴重な内容の故に、座右に備えるべき書籍の一冊に加えることを奨める次第である。

（B5，頁1102，図649，1984，
¥23,000，〒600，医学書院刊）